

目的 江戸時代の染織類にはどのような種類のものがあったか、それらの形態や縫製方法はどのようなものであったかをしらべる。

方法 静岡浅間神社に保管されている御神服60套のうち、『御神服調書』名では「御衣」9領と「精好御神衣」2領・「御下襲」6領の17套を対象にした実態調査である。

結果 製作年代は『駿陽歴代記』・『駿國雜誌』によれば「寛永18~19年のもの」、三代将軍家光が、新宮・総社・奈古屋社・山宮へ奉納したものである。

17套の表裂は、「精好御神衣」2領は紫精好、「御衣」のうち女領は色物の浮織物、他の5領と「御下襲」は白地浮織物で、裏裂はいずれも平絹又は生絹が使用されている。

形態は、「精好御神衣」は無欄の袍に似ているが袖は一幅、後身丈が下襲の裾のように非常に長い。「御衣」のうち女領も丈の短い無欄の袍に似ているが、袖は一幅で、すべて綿入である。他の5領は袷形態であるが、脇縫はなくすべて綿入である。「御下襲」は、後丈が前丈よりやや長い、上衣のみで別裾は無く、後身の背縫の裾に明子がつけられている。

いずれも服装史上には見あたらない形態のもので、先に報告した御神衣類と同様に、神祭のとき奉られる特殊の装束のようであるが、今後多くの遺品調査により明らかにしてゆきたいと思う。